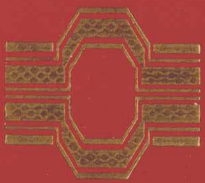

© 1969

日本文学全集56　尾崎士郎 坪田譲治集

昭和四十四年三月七日　印刷
昭和四十四年三月十二日　発行

著者　尾崎士郎　坪田譲治
発行者　陶山巌
印刷者　高橋武夫
発行所　株式会社　集英社
〒101　東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
電話　東京(265)六二一　振替　東京　二六六三三
印刷　大日本印刷株式会社
製本　文勇堂製本工業株式会社
中央精版印刷株式会社
有限会社石橋製本工場
製函　文京紙器株式会社
本文用紙　十條製紙株式会社
クロス　東洋クロス株式会社

検印廃止
落丁・乱丁本はお取りかえします

Printed in Japan

日本文学全集

尾崎士郎 坪田譲治 集

編集委員（五十音順）
伊藤　整
井上　靖
中野好夫
丹羽文雄
平野　謙

装　幀
伊藤憲治

挿　絵
中川一政

目次

尾崎士郎集
鶺鴒の巣　七
河鹿　一三
人生劇場（青春篇）　一六
蜜柑の皮　二七

坪田譲治集
善太の四季　二九
お化けの世界　三〇
正太の馬　三八

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

風の中の子供　三三八
注解　三九九
作家と作品　高橋義孝　四〇四
年表　四三一

尾崎士郎集

鶺鴒の巣

鶺鴒が街道に沿った岩かげに巣をつくった。背のびをしなくても手の届くほどの高さであるが、今まで誰れも気がつかなかったらしい、ということをある夕方瀬川君が来て話した。瀬川君の宿と南里君の宿とは十町ほど離れているが、道は一本筋だから彼は南里君の宿へあそびにくるごとに鶺鴒の巣の前を通るわけだ。巣のある場所は瀬川君の宿に近いところで、そのちょっと手前に小さい石地蔵がある。そこは真っ暗な道で、足の下の樹立の闇をえぐってひびいてくる激流の音が絶望的な呻き声のように伝わってくる。しかし、断崖は石地蔵の少し先きのところで道に並行してきゅうに傾斜しているのでその突端までくると、瀬川君の宿のあかりが見えるのである、鶺鴒の巣のあるのはその曲り角だ。曲り角では人間はたいていの場合、遠い眺望の変化に気をとられて、すぐ眼の先のことを忘れているものだ。だから、鶺鴒が街道筋の断崖の上に巣をつくったのは大胆すぎると言えば大胆すぎるが、しかし賢明な方法であったとも言える。なぜかといって往来に近い場所の方が蛇を避けるには都合がいいにきまっているし、それに第一、彼は人間よりも以上に蛇を恐れなければならないのだから。——

瀬川君は妙に昂奮しながら話した。彼はその巣を見つけたとき、町はずれの淫売宿にいる若い女がうしろからのぞきこんでいたということに彼は不安を感じていた。

次の日、南里君はその巣を見るために出かけた。石地蔵のところから、南里君は丹念に断崖の上に注意していったが、しかし、どこにあるかまるでわからなかった。南里君は茫然として立ちどまったまま所在なさに煙草を喫うためにマッチを擦った。すると、その音に驚いたように一羽の鶺鴒がとびあがった。南里君は慌てて身をひいた。その裂け目の上に枯草を積みあげてつくった小さい巣と、その中におずおずとうごいている三つの雛の頭をたしかに見たからである。一瞬間、南里君はかすかな衝動に襲われた。南里君が手をのばしさえすれば一羽の雛を容易に奪いとることができるのである。南里君はその雛が欲しいのではない。ただ、自分の盗心が誰れにも気どられないですむという気持が彼を唆りかける。——南

里君はそっとうしろを見た。誰れも近づいてくる者はない。南里君は素早く手をのばした。南里君は心臓が顫えるのを意識するとほとんど同時に指の先きから伝わってくるやわらかいぬくもりの中に少女の生活を感じた。南里君は自分が今何をしたかということについて考える余裕もなく一羽の雛をつかんで右手を懐ろの中へ入れたまま自分の宿の方へ歩いていった。道が行詰って新しい道につづく橋の袂まで来たとき、雛の身体から伝わってくるぬくもりがしだいに衰ろえつつあるのを感じた。懐ろの中であまりに強く握りしめたからであろう。そっと掌をひろげてみると雛はもう死んでいる。南里君はその死骸を川ぞいの草むらの中へ捨てた。同じ日の午後瀬川君が来たので、彼は、今朝鶺鴒の巣を見にいったという話をした。だが、雛は二つしかいなかったというと、瀬川君は、いや、そんなことはないはずだ。僕の見たときにはたしかに三ついたはずだが、と言いながら眉をひそめて、

「ことによると、滝の家（淫売屋の名前）の女が怪しいぞ。夕方もう一度見て、いなかったらあいつに聞いてみよう」

と言った。眼に見えないものを欺きおせたという気持のために何ということもなく南里君の心は晴れやかになった。彼はようやくにして一つの危険を突破した人間を自分の中に感じた。一瞬間、自分がある欲情を充たしたということをのぞいては、すべての状態が元のとおりではないか。南里君はそう考えることに少しの不安も感じなかった。

「とにかく、ひどいことをしたもんですね。そういえば、今日わたしがくるとき巣のまわりを鶺鴒がしきりに飛んでいましたよ」

そう言った瀬川君の言葉に対して南里君は平然としてこう答えた。

「鶺鴒はもう少し人通りの多いところへ巣をつくればよかったわけですね。蛇より人間の方がどんな場合でも道徳的だと考えたところに鶺鴒の錯誤があったわけだ！」

日暮れがた、南里君は瀬川君をおくりかたがた鶺鴒の巣を見に行った。陽がかげって、大気が夕靄のためにうすじめっているので水の音に秋を感じた。

巣のある場所の近くまでくると、足音におどろいたのか、一羽の鶺鴒が、もう一つ上の岩角へひょいととびあがって、軽く全身を弾むように動かせながら、不安そうに二人を眺めていた。瀬川君は巣に近づいて、じっと中をのぞきこんでいたが、きゅうに頓狂な声で叫んだ。

「一つしかいない。一つしか。——さっきまでたしかに

二ついたんだが」

南里君はぎくりとした。してみると、誰れか自分のあとから、もう一つ盗んだ奴があるにちがいない。南里君はきゅうに不安になった。ことによると、その男は自分の盗むところをこっそり見ていたのかもしれない。そして、その男は、おれがとらなくともどうせ誰れかがとるのだ、それにあの男がとった以上はおれがとったって差支ないはずだ。——見知らないその男はそう考えることによっておれに罪をなすりつけるつもりでとったのかもしれない。南里君は一瞬間、道徳的な感情の方へ引き戻されたが、すぐ猛然として跳ねっ返った。——誰れも見ていなかった。あのときはたしかに誰れも見ていなかった。おれはこんな幻覚におびえてはいけない。

南里君は、しかし、鶺鴒の親の悲しげな視線をうしろに感じながら、そこの曲り角から自分の宿へ帰ってゆく瀬川君とわかれて暮れかかった道を歩いていった。歩きながら、彼はこの村へ来てから知り合いになった一人の娘のことを考えていた。彼女は南里君の泊っている宿からあまり遠くない街道筋にある古い寺のひとり娘で、父と母が死んでしまって、おじいさんとおばあさんとだけに養われている。そのおじいさんと南里君とは将棋の友だちなので、彼は毎晩のように寺へ出かける。ありていに言えば、じつは将棋よりも娘の方が目当なのだ。彼女は今年十五歳であるが、身体つきの子供らしいにもかかわらずその瞳の底には成熟した女の嬌羞が潜んでいる。南里君が寺へゆきはじめてからやっと一ト月にも充たないのであるが、しかし、その間に娘の肉体は異常な発達を示した。それはちょうど梅雨のころの枇杷の実が一日ごとに色づいてゆくのを見ていると同じように、南里君は娘に対して新鮮な食欲を感じた。炉をかこんで話をしているとき、南里君は鈍い電灯のほかげの中に、じっとおびえるように自分を見据えている娘の視線を捉える瞬間があった。その視線は一晩じゅう彼を追っ駈けてきた。彼女の肉体の微細な部分についての想像が彼を悩ました。あの娘は自分の近づいてゆくのを待っているのだ、——と、南里君は思った。彼は自分の頭の上にぶら下っている木の実を空想した。もしそれをとろうとするならば、彼は背伸びをする必要もなく、ただ、手をのばしさえすれば足りるのではないか。機会はいくたびとなく彼の前を往復した。しかし、そのたびごとに南里君は妙に心のすくむのを感じた。そして、娘はだんだん色づいていった。——

その娘のことが、不意に南里君の頭にこびりついてきたとしても少しも不思議ではない。南里君の空想は異常

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertc

な速度で発展していった。今こそ、おれは何でもできるぞ、――と、彼は思った。彼はあの娘に対して自分だけが道徳的な責任を感ずる理由はないと思った。なぜかといって、彼がもしとることを躊躇したとしても、あの色づいた木の実は、偶然あの下を通りかかった誰れかによってかならずとられるであろうから。そういう考えが南里君の食欲を駆りたてた――「そうだ。今夜こそ、おれは」南里君は自分の決意をたしかめるもののように心の中で繰り返した。その夜、南里君は計画どおり娘に近づいていった。そして、無造作に、まったく無造作に娘の唇に触れたとき、彼は娘の存在が彼の掌の中に握りしめられた鶺鴒の雛よりも以上の何ものでもないことを感じた。しかし、夜が更けて、娘とわかれて宿へ帰ってから、彼の心は思いがけない一つの考によって圧えつけられた、彼は見知らない一人の男の顔を頭に描いた。そして――あの男がとった以上はおれがとったところで差支ないはずだ。――そう呟いている男の姿である。南里君はそういって瀬川君に話した。彼女の運命を支配する微妙な力をまざまざと見せつけられたような気がしたからである。――

数日後、南里君は、夜おそくまで話しこんでいた瀬川君をおくって外へ出た。夜がおそいし、それに月があるので、大気が澄み透っていた。うねうねとつづく街道筋を歩いて二人がいつの間にか石地蔵のある断崖の近くへくるまで南里君は鶺鴒の巣のあることを忘れていた。しかし、石地蔵の前までくると一瞬間、非常に冷めたいものが南里君の胸をすべっていった。不吉な妄想が彼の頭にうかんだのである。ことによるとあの巣の中には鶺鴒の雛は一つもいないのではあるまいか。――南里君は足音を忍ばせて岩かげに近づいていった。巣はもとの場所にあった。巣の中には一羽の鶺鴒が羽をひろげてうずくまっていた。

「こいつはね、この二三日僕が通るごとに巣の中にしゃがんでいるんだ。雛をとられやしないかと思って警戒しているのかもしれないね――」

うしろから肩越しに覗きこむようにして瀬川君が言ったとき、鶺鴒はきゅうに物におびえたように巣の中からとびあがり、街道を横切って樹立の闇の中へ消えていった。

南里君の眼の前には、ほのかな月明りに照らしだされた空虚な巣があった。積みあげた枯草の一角がばらばらに壊れて、巣の中は空き家のようにがらんとしている。そこには小さな雛の頭すら見出すことができなかった。

「へんだね。——雛はもう一つもいないじゃないか！」

月光の反射のために瀬川君の眼がうす気味悪く光った。南里君は自分の頬の筋肉がかたくなったのを感じた。一つの情景があわただしく彼の頭をかすめたのである。小さな炉をかこんで、正面におじいさん、その横におばあさんと娘とが並んで坐っている。——彼は鈍い電灯のほかげの中に、一つの欲情のために燃えている娘の悩ましい瞳をさぐりあてるときゅうに不安になった。

あの娘は近いうちに、きっと誰れかほかの男に誘惑されて寺を逃げだすにちがいない。——そういう予感が南里君の胸にひしひしと来た。

娘のいない古寺の台所が荒涼として彼の幻覚の中に現われてきたのである。

河鹿

川ぞいの温泉宿の離室に泊っている緒方新樹夫妻はすっかり疲れてしまった。彼らはお互いの生活の中から吸いとるかぎりのものを吸いとってしまっていた。愛することにも、憎むことにも彼らにとってはもはや何の新しさも残っていなかった。彼らはまったく同じ二つの陥穽の中に陥っているようなものだった。互いに、小さな感情で反撥し合うことと、残滓にひとしい小さな愛情の破片を恵み合うこととの退屈な習慣の繰り返しによって、彼らはかろうじて自分たちが対立しているということを感ずるだけであった。こういう生活はいつかは破れなければならない。――緒方新樹はそう思った。彼に従えば、つまり、これは誰れが悪いのでもない、彼らの結合がすでに不自然であったのだ。彼らは生理的に男であることと女であることとの区別をのぞいてはまったく同じ気質を持った人間であったから。――

ある晩、二人は寝床の中でこういう会話をした。最初、緒方新樹を揺り起したのは妻のA子である。

「ねえ、あなた、――わたしたちはこうやって暮しているうちに自分をすっかり擦り減らしてしまうような気がするじゃないの、それがわたしきゅうにおそろしくなったの。だからね、わたしいいことを考えたのよ。わたしたちはすっかりわかれてしまうことにするの。そうしてね、勝手な空想をするの。空想の中であなたがほかの女といっしょにどこかへ逃げていってしまったっていいわ。わたしがひとりのこされる。ね、そうするとわたしたちの生活がもっと生々してくるわ。ほんとうにわかれるんじゃないのよ。世間体だけそうするの」

「なるほど、そいつはいい方法だ。さっそくはじめることにしよう。だがね、おれはお前ほど空想的でないから動くのが厭だ。――おれの方に残される役を振りあててくれ」

「あなたはばかに冷淡なのね、あなたはそんな風な言い方をして平気なの、――わたしはもうあなたにはまるで要らないものになってしまったのね、あなたはわたしがほかの男と逃げていったりするのを黙って見ていられるの？」

「お前は自分勝手な奴だな。――お前がおれにとって要

らないものになってしまっているよりも以上に、おれはお前にとって要らないものになってしまっているじゃないか。おれたちの生活はそんな子供だましのような方法でゴマかすことはできなくなってしまっているんだぞ。——だから」

「だからどうしたの？」

「だからおれはもっと根本的なことを考えているんだ——」

「根本的なこと？　じゃあ、わたしたちはもうほんとうにすっかりわかれてしまうの？」

「そんなことはおれにもわからないさ。とにかくだ、おれはもうこういう話をすることにも疲れているんだ。おれは一人きりになりたい。そしておれの生活をとり戻したいのだ。おれはお前のかげを背負って歩いているようなものだ。お前がおれの敵だったら、おれはまだしも救われるだろう、だが、そうじゃない。おれたちは味方同士だ。憎み合っている味方同士だ。それにこんな古ぼけた痴話喧嘩のテーマをいくつ積みあげたところで同じことだ。お前は何にもおれに遠慮する必要はないのだからな、お前の新しいきずなにとびつけばいい。——こういうときには人間は自分を不幸にすることを恐れてはいけない」

「とんだ御説法だわね。そんなに自分を不幸にしたければ、あなたが御自身で決行なさるがいいわ。あなたはいつだって、自分のことだけしか考えていらっしゃらないくせに」

「おれが？——なるほど、おれは自分のことを考えているさ。だが、お前がおれよりも以上に自分のことを考えていないと言えるか」

「あなたは理窟がお上手なのね。わたしは一度だって、あなたとわたしとを別々のものにして考えたことなんかないのよ。それだのにあなたはいつもわたしのことと御自身のこととの間にはっきりとした境界をつけていらっしゃる。——わたしから離れよう離れようとなさるのがよくわかるわ。それを考えるとわたしはほんとにあなたにお気の毒でならないと思うのよ。ね、あなた。わたしたちはもうおしまいになってしまったのね」

緒方新樹はもう我慢がならなくなった。彼は自分の頭の中の冷静がしだいに乱れてくるのを感じた。A子の声が耳のそばで挑みかかるようにがんがん鳴りはじめた。彼の頭の中をA子との結婚生活が始まってからの数年間の記憶が入れ乱れて通っていった。その回想はすべて不快で濁っている。一瞬間、彼は自分が非常に不誠実で狡猾な、無価値な男のように思われてきた。すると、A子

とわかれることが、何かしら献身的な行為のように思われてきたのである。そうだおれはわかれてやろう。おれはほんとうに一人きりになろう。——彼はわざと身体を反対側にねじ向けた。陽に輝いた白い砂浜を控えた海が彼の頭の中に現われてきた。その砂浜の丘の上にある宿屋の二階でごろりと横になっている自分の姿を想像した。おれは一人で旅に出よう。そう思うと、彼はきゅうに自分の前に一つの新しい道がひらけてくるのを感じた。だが、これは何も今に始まったことではない。彼は、痴話喧嘩のあとでかならず自分の空想が同じ順序を追ってこういう気持に到達するのだという自嘲的な想念によって烈しく鞭たれながら、次に来るA子の言葉を待っていた。ここでおれはセンチメンタルになってはいけない。——と彼は思った。しかし彼が空想の限界を飛び越えるために心の構えを立てなおしたとき、彼は背中に忍びよってくるA子のすすり泣く声を聞いた。すると、彼は何か一つの強い衝動がおびきだされてくるのを感じた。

「ねえ、あなた、——ほんとうにわたしたちはもうおしまいになったの、ね、ね」

A子の身体のぬくもりが彼の身体に迫ってきた。二つの掌が、吸盤のようにぴったりと彼の背中に吸いついた。ばか野郎、貴様はひっこんでいろ！　緒方新樹は胸の底から疼くようにのぼってくる衝動に向ってこう叫びかける、おれは今大事なときなのだ。

「ねえ、あなた、ほんとうなの？」

「ほんとうだ」

「じゃ、わかれてしまうのね？」

「そうだ。——」

しかしそう言ってから彼は、きゅうに心の中がげっそりして虚ろになってしまったような気がした。A子が彼の背中にしがみついて烈しく泣きはじめた。その泣声が、彼の胸の中にひろがってきた。彼は少しずつ自分がうしろへ引き戻されてゆくのを感じた。

「おい。お前はじっとしているんだ。おれはちょっとそとを歩いてくるから」

緒方新樹はついと身を躱すようにして立ちあがった。彼はうしろにA子の声を聞いたような気がしたが、しかし、彼はわざとその声を払いのけるもののように縁側の障子をぴしゃりとしめた。星の冴えた夜である。彼は宿の裏手の草道伝いに水ぎわまでおりていった。彼の眼の前にはまん中にある大きな岩のために川の流れが二つにわかれ岩の横腹には波の飛沫を浴びた水苔がうす闇の中に光っている。彼はその前にしゃがんでじっと岩の横腹

を見詰めていた。すると断続的に岩に殺到してくる白い浪がしらの尖端から黒いものが岩にとびつき、そのままずるずると上の方へ這いあがってゆくのを見た。

一つ、二つ、三つ、——と、彼は水苔を縫うように、ぬらぬらと這ってゆく異様な生物の行方を追っているうちに、やがてそれが河鹿であるということに気がついた。闇の中に人間の模型のような四本の手足が、ちょうど裸体の人間を見るようにぺったりと滑かな岩の面にへばりついている。

そのとき、一匹の河鹿が、岩角にしゃがんだと思うと流れの方に頭を向けて、美しい声で鳴きはじめた。すると、また一匹、また一匹、といった風に、岩をめぐって澄みとおった鳴き声が川波の音を潜ってひびいてきた。それは何か異常な衝動に唆しかけられているもののように彼の耳に迫ってきた。その鳴声は彼の心に生々しい性慾を喚び起した。彼は力なく蒲団の上にぐったりと横わっている妻の姿を想像した。妙な、不愉快な感情が彼の胸をかすめた。彼が慌てて立ち上ろうとしたとき遠い川岸からいっせいに河鹿の鳴き声がむらがるように起ってきた。——その鳴き声は流れとともに近づいてきた。一匹の河鹿が岩角に縋りつきするすると巧みな腰つきで上に這いあがった。つづいて、もう一匹もう一匹と、転ろがるように咽喉を鳴らしながらのぼってくる。——最初の一匹が、前にいた河鹿に近づいて、うしろから、ひょいと胴体にとびついた。とびつくと、そのまま胴体を抱きすくめたまま両足をだらりと下へのばした。鳴き声の調子がきゅうに変った。と、見る間に二つ折り重ったまじりじり岩をすべりおりた。やがて、彼の前を雌と雄の二匹の河鹿が、胸をぺったりと吸いつけて下流の方へ流れていった。次の一組が現われた。そして、あとからあとからと同じ恰好をした二匹の河鹿が、頭だけを二つの流れの上に擡げるようにして下流の闇の中へかくれてゆく。絶え間なしに続いてゆく河鹿の行列を眺めているうちに緒方新樹は妙に心が晴ればれとしてきた。彼は酔っぱらったようにごろりと砂原の上に横になり、低い声で唄をうたいはじめた。彼の頭の上には星のうかんだ空がひろがっていた、彼は自分の唄う声が川波の音の中に消えてゆくのにじっと耳をすませながら、自分の心は今、非常に荘厳な何ものかに当面しているのだ、という気持になった。すると、彼の幻想の中で河鹿の行列のあとから、真裸体になった妻の身体をうしろから抱きすくめて悠揚として流れて行く自分の姿が神々しいもののように描きだされてきたのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto